

# 初代院長 W. R. ランバスと中国

関西学院大学経済学部・言語コミュニケーション文化研究科教授 趙 怡

関西学院は中国との縁が深い。創始者ランバス（Walter Russell Lambuth, 1854-1921）は上海に生まれ育ち、「KWANSEI」という校名の読みも、隋唐時代の主に長安地方の発音で日本の漢音の原音でもあったため、彼が選んだものという。当時の中国語新聞に寄稿された氏の記事からもその漢文造詣の深さが窺える。

## 戦乱のなかでの誕生、上海で過ごした日々

上海はアヘン戦争により開港され、それに伴い西洋各国による宣教活動が始まる。1854年9月、アメリカ南メソヂスト監督教会の宣教師 J. W. ランバスと妻メアリーは、4ヶ月以上もの過酷な船旅を耐えた末上海に到着したが、「街は戦と混乱の真っ最中にあり、上陸してすぐに砲声が四方八方から聞こえてきた。都市はすでに反乱者の手に落ちていた」（J. W. Lambuth, 1877）。太平天国の一派である「小刀会」が県城を占領し、大量な難民が城外の租界に流れこむ時期だった。2ヶ月後の11月10日、W. R. ランバスが誕生した。上海はその後も太平天国軍からの攻撃や疫病の流行に遭い、祖国には南北戦争も起き、一家は10年もの間に戦乱と貧困に苦しめられた。

「鄭家木橋」のそばにあるランバス家の住居は、フランス租界に位置し、上海県城に近い。ランバスは誕生から5歳までの幼年期、10歳から15歳までの少年期、そして青年期の数年間をここで過ごした。布教活動の傍ら、貧しい人々の看病と教育に尽力する両親のもとで、ランバスは中国人の子供と混じって育ち、中国語で話すことの方が多かった。学校教育はアメリカで受けたものの、彼の中国理解の原点は「鄭家木橋」にあり、上海は故郷であった。のちに医療宣教の道へ進めたのも、そこにいる病気に苦しむ人々を救うためだった。

## 中国人に愛された「藍華徳医師」と「藍華徳会督」

1877年、アメリカの大学を卒業した23歳のランバスは、新妻を連れて上海に戻り、「藍華徳医師」として活動を始めた。田舎を巡回して医療を施し、上海の西北（「郊外」ではない）に位置する南翔に診療所も開設。また1881年の渡米を機に米英の一流大学病院で解剖学、生理学、眼科の研究も進めた。翌年の末に友人で医師の W. H. パークを連れて上海に戻ったランバスは、早速蘇州に赴き、一年後に「博習医院」（現・蘇州大学附属第一医院の前身）を

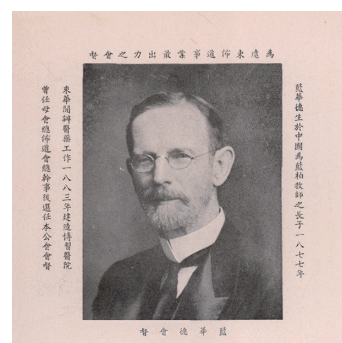
開業した。内陸地においては中国初の近代的な病院であり、内科、外科、眼科、手術室、病室のほか、アヘン中毒治療所も設置された。二人の若き医師は、6名の中国人の助手と共に診療に当たり、医学生も多く育った。ランバスが病院を離れた後、パークは院長になり（のちにランバスの妹ノラと結婚）、1927年帰国するまで「柏楽文」の名で中国の医療と教育に生涯を捧げた。

1884年、ランバスは家族と共に北京に移り、医療宣教を続けた。その後日本に渡り、1889年に関西学院を創設して初代院長になったことは周知の通りである。

1907年4月、モリソン来華宣教百周年の記念を兼ねて上海で全国宣教師大会が開かれ、ランバスも南メソヂスト監督教会の全権代表として出席。その間、土地売買をめぐる長年揉めていた浙江省の「湖州事件」をパークと共に仲裁した。教団が現地民の土地を半ば強奪することに反発して宣教師の殺害と教会の破壊を伴う「教案」が各地で頻発したなか、法律を通して解決できた稀な成功例だった。中国語と中国の事情を熟知し、土砂降りのなか泥道を歩いて現場に赴き、じっくり双方の意見を聞いたランバスとパークであればこそ得られた結果である。

1910年にビショップ（「会督」）に選出されたランバスは、1919年、自ら東洋地区伝道の担当監督となり、以降毎年この地域を訪問した。常に現地の人々に寄り添い、1920年には中国北方の飢饉地帯を視察して多くの募金を集めて被災地域に送った。その姿は真の友として人々の目に映ったに違いない。

1921年9月、ランバスが訪日中に逝去した際、多くの人々が哀悼の意を捧げた。遺体は上海に運ばれ、ムーア記念堂（現・沐恩堂）にて厳かな追悼式が行われた後、八仙橋にある外国人墓地の母の傍に埋葬された。（ちょう い）



『中華監理公会年議会五十週記念刊』（1935年、上海図書館所蔵）に掲載された「藍華徳会督」の肖像。上には「為遠東布道事業最出力之會督」と書かれている。

\*ランバスと中国については、拙稿「上海と周辺地域における W・R・ランバスの活動」（大学リポジトリ所載）なども参照されたい。